

戸川秋骨

夏目氏と英文学



# 夏目氏と英文学



「文学評論」は誰も知っている通り、十八世紀の英文学を説いたもので、大学での講義であるそうだ。がこれに就いてはその公刊当時自分は新聞紙上で卑見を述べた事があった。その時自分は何と言ったか精しい事は今覚えて居ないが、その内には十八世紀のイギリスの社会がよく叙述されて居た事は、なお記憶に止って居る事の一である。自分はよくは知らないが、これに就いて Leslie Stephen の十八世紀に関する研究なども随分参考になっ

た事であろうが、怎うもその内には夏目氏独特の研究と言おうか視察と言おうか、自分の少い智識から見ると、西洋の本には見当らない点が多々あると思われた。レエノオヅの絵画などからの観察は、西洋では普通に言う処かも知れぬが、自分には目新らしいものであつた。さらに自分の最も面白いと思つたのはポオプを論する場合、バイロンのこの絢爛な詩人に私淑していた事から説き立てて、ポオプの必らずしも四六駢驪的技巧の詩人でなかつた事を断じ、スヰフトのガリヴァ巡島記に、これも新説ではないかも知れぬけれども、変つた観察を下した処

は非常に面白く、且つ自分に利益する処頗る多かつた。その上或意味に於ては吾々に縁の遠い、そして格別面白くもない十八世紀の散文を著者が沢山に読んで居られたには驚嘆した。たとえばデフォーの如き作家のあまり重んず可きでない事を断言する迄には、此作家の浩瀚な作品を、可なり沢山に読破していられるのであつた。これ等の点に就いては、多少記憶の上に間違いがあるとするも、大体自分が以上の如き感銘を受けた事丈は確かである。

この文学評論の出た当時、自分は早稲田大学で、英文

学史のようなもの——ようなものとは曖昧な言い方であるが、事實は西洋人の手になった文学史を読む位な事に過ぎなかつたのである——を講じていたがその時試験をして見た処、その沢山の答案の中には、この文学評論に書いてある事を丸呑みにしたのも少からずあり、少くともこれを読んで答案を書いたというに到っては随分多数を占めていた。

さて自分の平素考えている処に依ると、イギリスの文学は政治の文学である。治国平天下の文学である。然るに夏目氏の文学は大分それとは異つたものである。イギ



リスの小説家は、大抵社会というものを眼中に置いてい  
る。風教というものを眼中に置いている。然るに夏目氏  
の小説には、間接に読者がそういうものを擲み出すなら  
格別、著者自らが意識して、そうした考を作中に香おわ  
せたという事は、まずないといつても良い。果してそうで  
あるとすれば、夏目氏の小説なり又思想なりは、イギリス  
の文学とは没交渉であるといつてもよいであらうか。蓋  
し之は直ちに、そう論断する事は出来なない事であらうと思  
う。何となれば、政治とか風教とかの問題は、小説を論ず  
る場合の一問題に過ぎぬからである。自分の考える処に

依ると、イギリスの文学は、又一方から言えば意志の文学である。そして夏目氏の作にも、一方に理智の精透があると共に、一方には少からず意志の力が働きをなしている。之がまずイギリスの文学と夏目氏の文学と共通するところで、夏目氏本来の面目が、英文学の爲めにより開發せしめられたとも言えると自分は考えている。漢学流の四角四面な端正な態度は、思想の上でも行為の上でも、大いにイギリスの紳士風と似ているところがある。この点が夏目氏の性格随つて其作物と、イギリス氣質随つて其文学との相通ずる一点ではあるまいか。

なお可笑味を以てイギリスの文学と夏目氏の作物との関係をつける人も随分にあるようである。蓋し可笑味は徳川期以来江戸文学の一特徴であり、又実に江戸育ちのものの特質の一であるから、東京人たる夏目氏に其の片影の見えるのは当然である、又イギリス文学にも可笑味は随時随所に散見するが元来可笑味はイギリス独特のものであるうか。自分はつい深くも考えていながったが、あの莊重なイギリス人は由来特に滑稽味に富んでいるのであるうか。成程ディケンスにも、サツカレーにも滑稽味はある。ラムにもそれとは異った実に精妙な可笑味は

ある。十八世紀にもあれば、十九世紀にも、二十世紀にもある。自分はイギリス文学に此の趣を認めるに人後に落ちぬ積りであるが。只それはイギリス文学に限つたものであるだろうか、其点は稍疑問である。大陸の文学には此の趣味はないのであろうか。或はイギリスにある程の其趣味は大陸にも認められはしまいか。例えばケルト民族の有っている可笑味はフランスにもありはしないか。全体文学の十分に発達している国ならば、其の内に可笑味の文学のあるのは当然で、何もイギリス文学にそれが多いたとは限るまいと自分は思うのである。只自分は大陸文

学に就いては不知案内であるから、何とも言えないが随分其内にも可笑味の文学はありそうに見える。

夏目氏はイギリス文学のみでなく、人に吹聴し広告こそしなかつたが、大陸の文学に就ても随分知識を有つて居られた。否世間の吹聴者以上の智識を有つていられたらしい。従つて氏の有つている可笑味が英文学から来たと断定するのはそれこそ少し可笑しいと思う。少くとも氏の可笑味の如何なる種類のものであるかを極めた上でなければ、そんな断定は出来ぬと思う。要は可笑味の性質如何に帰着する。或は氏の可笑味は江戸式の余裕から

来て、それに氏一流の哲学若しくは一種の俳諧味若しくは禅味のようなものが加わったのかも知れぬ。(新小説第二十二年第二号より)







日本文学電子図書館

---

## 夏目氏と英文学

著 者：戸川秋骨

制作者：宮澤一郎

底 本：漱石全集(昭和49年版) 附録  
岩波書店

昭和50年3月10日 発行

---

日本文学電子図書館